

農産 F A X 情報 第 5 号

令和 5 年 7 月 1 5 日
ゆとりみらい 21 推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 秋まき小麦

○収穫作業の準備

- ・早めの作業準備に努めましょう。コントラ等、集団で作業を行う場合は降雨等の緊急時対応を事前に協議し、周知徹底を図りましょう。

○収穫適期の判定

- ・子実水分 30%以下が収穫開始の目安です。
- ・本年は平年より 4~5 日早く生育ステージが進んでいます。ほ場を観察し、枯れ上がりの早いほ場から収穫を行いましょう。

○収穫作業の留意事項

- ・倒伏、病害が多発したほ場は、別刈り・部分刈りの対策を行いましょう。
- ・コムギ縮萎病発生ほ場から未発生ほ場へ移動する際は作業機を洗浄し、発生の拡大を防ぎましょう。

2 ばれいしょ

○疫病の防除

- ・本病原菌は 18~20℃・降雨等による多湿条件で活動が活発になります。引き続き気象予報に注意し、予防防除に努めましょう。
- ・小麦収穫作業との競合や降雨が予想される場合は、ダブルインターバル薬剤（防除間隔 14 日間）を活用ましょう。

○軟腐病の防除

- ・本病は高温多湿条件で発生しやすく、倒伏等で茎葉が傷つくと発生が助長されます。気象経過・茎葉の状況に合わせて防除を行いましょう。
- ・耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避けましょう。特に、オキシリニック酸剤、ストレプトマイシン剤は低感受性・耐性菌が出現している地域があるため注意ましょう。

3 てんさい

○褐斑病の防除

- ・本病原菌の活動は 25℃程度・湿度 85%以上が最適条件です。
- ・7 月上旬は気温・湿度が高かったため、本病の発生が散見されました。引き続き、予防防除に努めましょう。
- ・QoI 剤、DMI 剤、カスガマイシン剤は耐性菌の発生が確認されているため、マンゼブ剤、銅剤を主体とした防除を実施ましょう。また、散布間隔は 14 日以下とし、上記の高温多湿条件となった場合は 10 日以下で防除ましょう。

表1 褐斑病の防除例

薬剤名	希釈倍率 (倍)	使用回数 (以内)	使用時期 (収穫前)	成分
ムケツDX	500~800	3	21日	マンゼブ メチルテトラポール
グリーンダインM水和剤	400~500	5	21日	マンゼブ
どさんこスター水和剤※	500	4	21日	フェンブコナゾール ・マンゼブ
フジドーLフロアブル	400	—	—	銅
カスミンボルドー※	800	5	7日	カスカマイシン ・銅

※DMI剤・カスカマイシン剤は耐性菌が確認されているため使用回数を可能な限り低減する。

4 豆類

○菌核病、炭疽病、灰色かび病の防除

- ・菌核病、炭疽病は開花期以降の多湿、灰色かび病は低温多湿で発生が多くなるため、気象経過や生育ステージに注意して防除を行いましょ。
- ・小豆、菜豆の灰色かび病1回目の防除開始目安は開花1週間後です。その後7~10日おきに3回実施しましょ。
- ・灰色かび病はチオファネートメチル水和剤、フルアジナム剤、ジカルボキシイミド系剤に対する耐性菌が認められています。適切な防除を実施しましょ。

○鱗翅目幼虫の防除

- ・大豆、小豆のほ場でモンキチョウ・ツメクサガ・ウワバによる食害が散見されています。ほ場観察を行い、若齢幼虫の内に防除を行いましょ。

○さび病対策

- ・本病は被害茎葉が感染源となり、多湿土壌で生育初期の感染が多発するとされています。輪作が短い場合や、過去に発生があったほ場は予防防除を行いましょ。

◎農薬のドリフトに注意！！

◎収穫用機械の点検整備を万全に！

◎水分・塩分補給で熱中症対策！！

◎適度な休憩・休息で、農作業事故防止！！！！